

住宅建築賞2017入賞作品展

RESIDENTIAL ARCHITECTURE PRIZE

住宅建築賞入賞作品展

住宅建築賞2017入賞作品展
2017年
6月21日(水) - 6月30日(金)

入賞レセプション／オープニングパーティー

申込先着順 定員:80名 入場無料

6月21日(水)

■ 入賞レセプション
16:30～18:20 / AGC studio(2階)

■ オープニングパーティー
18:30～20:00 / AGC studio(2階)

※入賞レセプションは審査員による入賞作品講評、および入賞者とのディスカッションになります。

■ 住宅建築賞 審査員
審査員長: 乾 久美子
審査員: 青木 淳 / 金野千恵 / 平田晃久

■ 主催
一般社団法人 東京建築士会

■ 後援予定
公益社団法人 日本建築士会連合会
一般社団法人 東京都建築士事務所協会
一般社団法人 日本建築学会 関東支部
公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
株式会社 新建築社
株式会社 エクスナレッジ

■ 協賛
ファーバーカステル
株式会社 建築資料研究社 日建学院
株式会社 総合資格

■ 協力
AGC旭硝子 ビルディング・産業ガラスカンパニー
工学院大学 木下庸子研究室

■ 申し込みお問合せ先
一般社団法人 東京建築士会
東京都中央区晴海 1-8-12 オフィスタワーZ棟 4F
tel.03-3536-7711 fax.03-3536-7712
e-mail:jks@tokyokenchikushikai.or.jp
www.tokyokenchikushikai.or.jp



〒104-0031 東京都中央区京橋2-5-18 京橋創生館1・2階
tel.03-5524-5511 www.agcstudio.jp

2017.6.21 wed - 6.30 fri

[日曜・月曜休館]

10:00～18:00 入場無料

AGC studio

住宅建築賞 入賞者

- 住宅建築賞 金賞
■ 中川エリカ
- 住宅建築賞
■ 駒田剛司 + 駒田由香
■ 伊藤博之
■ 佐野哲史 / 高野洋平 + 森田祥子
■ 萩野智香

住宅建築賞入賞作品 2017年 | 一般社団法人 東京建築士会

応募主旨 審査員長 乾 久美子

【希望のある住宅】

住宅は、住まい手が、環境を選びとり、建て、住まうといった一連の行為の総体として現れるものだと思います。それは生きることと同義となるぐらい迫力のあるものだと思います。また、建てることは 希望をつかみとるような行為なのかと思います。

しかし、近代を経て、建てるのが産業界の世界へと取り込まれてからというもの、建てることと生きることのつながりは薄くなり、建てることの多くは、車やテレビなどの消費財を選ぶこととあまり変わらなくなってしまったように思います。建売を買う、商品化住宅のメニューから選ぶというような行為によって、あまり苦勞をせずに整えられた環境を得ることができるようになりましたが、そこで得られる環境は、地域や風土から切り離されたものにとどまるのかもしれない。同時に、住まうこと、その先にある生きることそのものは、根底から揺らいでいるような気がします。住宅から生きる希望が見えないのです。

東京建築士会の住宅建築賞の応募作品に確認したいのは、住宅が、施主が選びとった環境の中で、生きることや希望とセットになって建っているかどうかです。住宅を通して、生きることの迫力や厚み、ユニークさが、現代においてどのように達成されているのかを見たいと思っています。骨太な作品に出会えることを楽しみにしています。

応募要項

- (1) 上記の主旨にかなうもの
- (2) 一戸建住宅、集合住宅及び併用住宅等とする(大幅な増改築、公共の建築も含む)
- (3) 原則として作品は最近3年以内に竣工したもの
- (4) 雑誌等に発表したものでもよい
- (5) 建築物の所在地は1都3県(東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県)とする
- (6) 応募の点数は自由とする
- (7) 審査員の関与した作品は応募できない

応募要件

応募資格 応募作品を設計した建築士資格を有し、建築士会正会員である者
登録料 本会正会員:無料(申込時に入会した方を含む)
他県 建築士会 正会員:1点につき5,000円(作品を郵送する場合、登録料は現金書留にてお送りください)

提出期限 2017年1月31日(火)(郵送の場合は、1月31日(火)の消印があり審査に間に合うよう到着したものは有効)

提出先 一般社団法人東京建築士会 住宅建築賞係
〒104-6204 中央区晴海1-8-12オフィスタワーZ棟4階
TEL 03-3536-7711

提出資料 申込書及び本会指定A2版台紙
※第一次審査を通過した場合、建築士免許コピー及び検査済証のコピー(確認申請不要物件は、不要理由を明記した文章)の提出を求めることがある
図面及び完成写真数点(内・外觀)、平面図、立面図、断面図、配置図、設計主旨(300字以内)等をA2版台紙一面(本会指定の用紙・原則として縦づかい、パネル化しない)におさめること。なお、写真の大きさ図面等の縮尺及びレイアウトは自由とする。プレゼンテーションの表現自体は、審査の対象としない。
申込書及び本会指定A2版台紙は本会事務局において頒布します。郵送希望の場合は、宅配便着払いにてお送りできます。その場合、①件名を住宅建築賞申込希望、②氏名、③送付先、④連絡先、⑤会員番号等を明記のうえ、E-mailまたはFAXにてご請求ください。なお、事務処理の迅速化を図るため、宅配便着払い了承の旨お書き添えください。
(E-mail:jks@tokyokenchikushikai.or.jp FAX:03-3536-7712)

審査員

審査員長 乾 久美子

審査員 青木 淳/金野千恵/平田晃久

審査

1| 第1次審査(書類審査)に通過したものは原則として現地審査する。

2| 入賞発表 2017年4月中旬

- ・審査結果については、応募者に直接通知する
- ・応募者は審査結果について異議を申し立てることができない

表彰及び賞金	1	入賞者(5点以内)に対し賞状(盾)及び賞金を贈り、入賞者の中から特に優れたものには金賞を贈る。 住宅建築賞 70,000円 住宅建築賞金賞 150,000円	応募図面の取扱い	1	応募図面の公表及び出版の権利は主催者が保有する。
	2	建築主、施工者には入賞を記念する盾を贈呈する。		2	入賞作品は本会ホームページ及び会報等に掲載する。また、入賞作品展(公開展示:6月開催)の予定がある。
	3	表彰式:総会の席上(6月上旬予定)		3	入賞作のうち、東京都内に建築されたものの中から1点を「関東甲信越建築士会ブロック会」の優良建築物表彰候補作品として、推薦することがある。
				4	応募作品は返却しない。

審査結果(2017年 住宅建築賞)

応募点数 97点 住宅建築賞入賞 5点(内金賞1点)

住宅建築賞金賞	桃山ハウス (静岡県)	■設計者:中川エリカ(中川エリカ建築設計事務所) ■建築主:泰和企業株式会社 ■施工者:箱根建設株式会社(建物構造:鉄筋コンクリート造一部鉄骨造・木造)
住宅建築賞(受付順)	TRANS (東京都)	■設計者:駒田剛司+駒田由香(駒田建築設計事務所) ■建築主:匿名希望 ■施工者:仲野工務店(建物構造:鉄筋コンクリート造)
	辰巳アパートメントハウス (東京都)	■設計者:伊藤博之(伊藤博之建築設計事務所) ■建築主:阿部弘子 ■施工者:サンユ-建設株式会社(建物構造:鉄筋コンクリート造一部鉄骨造)
	Around the Corner Grain (埼玉県)	■設計者:佐野哲史(Eureka)/高野洋平+森田祥子(MARU.architecture) ■建築主:本田勝博 ■施工者:TH-1(建物構造:鉄骨造)
	いえとそとのいえ (東京都)	■設計者:萩野智香(萩野智香建築設計事務所) ■建築主:匿名希望 ■施工者:有限会社深澤工務店(建物構造:木造)

参考資料

1次審査結果 2017年2月17日(金)実施。応募作品97点より、1人6点~9点を投票(審査員4名)

【1次投票】

審査員	作品番号									1次投票結果	(計17点)			
	獲得票数	作品番号									合計			
乾	4票	65、67										2作品		
青木	3票	63、69、78										3作品		
金野	2票	75、79										2作品		
平田	1票	11、17、19、24、32、40、59、71、89、94										10作品		

1次投票17作品より議論し、2次投票を行った。

【2次投票】

審査員	作品番号					2次投票結果(下記8点より、議論)	(計8点)			
	獲得票数	作品番号					合計			
乾	4票	67、78						2作品		
青木	3票	24						1作品		
金野	2票	59、65、69、89						4作品		
平田	1票	75						1作品		

下記5点を1次審査通過とし、2次(現地)審査対象とした。2次(現地)審査は、3月6日(月)に実施した。

24 59 67 78 89



1次審査風景

4年間務められた西沢立衛さんから委員長を引き継ぎ、テーマを「希望のある住宅」とした。大げさな設定だが、記号的な表現の住宅が溢れる中、住宅を建てるのが、生きるための希望をつかみとる活動だということを、どうしても確認してみたいと思った。

今年の応募総数は97点と去年の1.5倍となった。2月17日に応募図書資料による1次審査があり、投票と議論を経て5作品を現地審査対象に選出し、3月6日に2次の現地審査を行った。去年よりは期間的な余裕があったものの、やはり、これだけ多くの方の日程を合わせるの大変なことである。毎年のことであるが、現地審査を快く受け入れてくださる施主や住まい手の方々、そして施主との日時のコーディネイトを引き受け、現地立会いでの説明に駆けつけてくださる設計事務所の方々に、深く感謝を申し上げたい。

さて、現地審査の当日は時折小雨がばらついたが見学の支障をきたすほどでもなく、概ね良好な状態で審査ができた。応募要項にも関わるとは、今年度より審査時間が限定されるようになった。長距離バス事故が続いている影響でワンマン運行の運転時間が9時間と厳しく制限されるようになったからである。その時間内で本審査がまわることのできるよう所在地の範囲を変更したわけだが、その成果もあり、すべての物件の審査を日暮れ前に終えることができた。バス移動中に行なわれた議論は、ひとつひとつの作品に関して若干の相違はあったものの、概ね審査員の意見は一致し、投票ではなく議論だけで金賞1作品、4作品を住宅建築賞に決めることができた。

「いえとそとのいえ」は見立ての建築である。外とみなす場所に自由な使い方を想定しておおらかな居心地を獲得していることに好感を覚えたが、見立ての可能性がもうすこし広げられたのではないかとも感じた。「Around the Corner Grain」は長屋で解かれた賃貸住宅である。本来共有することのない外部階段を二重にしたり交差させたりすることで、長屋でありながらも commons の感覚が生まれる瞬間をつむぎだそうとしている。また、スキップフロアや天空率を使いながら得たポーラス状の外観など、多様性を獲得するための手段が多数投じられていた。ただその効果が手続きの数にとどまっているようなところがあり、加算ではなく乗算的な方法を試みるべきなのではという声が上がった。「辰巳アパートメントハウス」は躯体に住まうというイメージに共感を覚えたが、実物の仕上げ面の多さや、構造の合理性に対して疑問の声があがった。「TRANS」では、家の中を隙間の集合体とすることの設定は面白いと感じたものの、隙間の経験が周辺の都市環境とつながっていないことが惜しかった。ただ、以上の4作品は、総じて非常によくまとまっており、施工もしっかりとしている力作であることは間違いないと審査員一同で同意した。

そうした中で、最後にみた「桃山ハウス」は全く逆のベクトルを示していた。歴史を感じる既存擁壁や周辺の環境に呼応するように大屋根をかけ、その下に小さな小屋群を配置していくという住宅である。素材の選定や壁の配置、工法などが投げ出されたように散在しており、未完成ともとれる環境であった。かといって居心地が悪いわけではなく、むしろ爽快であった。残念ながら施主にお会いすることはできなかったが、クリエイティブな職業につく団塊の世代だという。若い建築家の破天荒な設計に老後の拠り所を託すあたり、世代特有の熱い意志と批判精神を持つ方なのだと思うが、精神の解放を求める意志のようなものが、施主と建築家との間で強く共鳴したのではないだろうか。ここに一種の「希望」を感じないわけにはいかなかった。一般的な希望であると言い難いし、計画的な破綻をきたしている部分も、単に荒いだけに感じられる部分も散見される。しかし、これまで住宅が独特な希望の形を施主と共に練り上げてきた歴史を思い起こせば、「桃山ハウス」はひとつの可能性であろうと判断した。

なお、静岡県にある「桃山ハウス」は要項違反の応募なので、金賞受賞作として経緯を説明しておくべきだろう。まず、応募者から事前に応募の可否を問う連絡があり「審査員の判断とする」という回答を事務局が出した。そうした中で、一次の段階から審査員の目をひいたこと、そして神奈川県との県境に近くバスルートに乗せても一日のスケジュールが破綻しないことから、審査対象とすることにした。応募範囲の問題は来年度以降も続くと思われるが、最初に記したように、バスの規定という現実の問題から決まっていることを会員全員の共通認識とし、そのことを踏まえた弾力的な運用をするのがよいのではないかと思う。



作品講評

2017年 住宅建築賞 作品講評

住宅建築賞 金賞

桃山ハウス

設計者

中川エリカ (中川エリカ建築設計事務所)

講評者

平田 晃久

衝撃的な問題作であると言って良いのではない。しかし同時に(あるいはそれゆえに)、全体をつらぬくポジティブなメッセージに満ちている。そのことが放つ「希望」のようなものに、金賞の軍配が上がった。

いわゆる「ポストモダン建築」の失速以降、なんとなく共有されてきた建築の不文律のようなものが、ほぼ無視されている。柱は、屋根を支えるという機能とは無関係に、内外の空間に奥行きを与えるという視覚的な喜びのため

に配置されてしまう。あげくに、柱から屋根への持ち出しが発生し、柱上部のピンジョイントやボルトが露出した即物的な状況になる。屋根は、内部から周辺への視線の抜けを重視して、立面プロポーション的には間が抜けた高い位置に浮かんでいる。サッシュの横棧や間仕切の上端の高さも徹底的にばらばらだ。柱下部のモザイクタイル、歪な円形に切り欠かれたテラコッタ、場所ごとに異なるポーチの素材…。要するに一見、無茶苦茶に見えるのである。しかしそれは「不文律」に慣れた目もたらず錯覚ではないか、とこの建築は凄むのだ。

坂道に沿って続く味わいのある塀や周辺の地形と緑を活かすために、この建築がとった唯一のオーセンティックな方法が、変化する状況の測定面としてのフラットーフだった。残りの所作はほとんどピクチャレスクと言えるほどに、個別のシーンにおける自然な活気のようなものに捧げられている。それは建築とそれ以外の要素が、内外ともに混ざり合うような自然さであり、なおかつある概念で簡単に一括りにされない、違和感のある要素の存在も含



めたそれである。そこには、生の豊かさを可能な限り増幅しようとする作者の、確かな気概がある。

そういうポジティブな側面が、単なる作法上の拙さと渾然一体となって、ほとんど腑分け不能であることも事実だ。しかし作法と不文律はどう異なるのか。この建築はどうやらそのクリティカリティーに触れており、私たちに苛立たせつつ、鼓舞する。



小さなスペースが、隙間を介して分かたれつつ繋がり、変化のある流れや場所の豊かさをつくりだしている。建物の間口いっぱい、前と奥に細長い吹き抜けを設けたのが肝である。残されたスペースもさらに分割されるという徹底ぶりだ。しかし一旦分けられたスペースは開口で半ば結ばれ、全体は小スペースのネットワークのような様相を呈している。おそらくそれは設計者が意図し、施主も望んだ姿であって、その意味でこのプロジェクトは確実に成功している。

他方、議論になったのは、この住宅の周囲の街に対する構えについてである。周辺は古い小工場が点在する落ち着いたエリアで、小スケールの周辺建物の残余に積極的に関与できそうに見える。もし、内部と同様の想像力が、外部にも延長して展開されていたら、その時生まれていたであろうさらに豊かな状況と比較した時、この建築の構えが少し窮屈に感じられたのだ。もちろん、高い完成度を持つ住宅であることは前提の上である。



長屋の可能性を追求することが「Around the Corner Grain」でのひとつの目標だったのだろう。本来共有することのない外部階段を二重にしたり、反対側から上がってくる階段を交差させて通り抜け動線をつくったりしながら、界壁以外の共有物はないという長屋の前提を覆している。それにより丘陵地の集落のような新鮮な経験をつくり出している。また、スキップフロアや天空率を使いながらポラス状にテラスを配置し、多様性を獲得するための手段が多数投げられていた。それにより多様な種類のユニットを生み出し、賃貸不動産としての価値をあげることに成功していた。オーナーの方が非常に満足そうにしておられることが印象的であった。いくつかの疑問点としては、多様性のあり方がどこに向かっているのかが見えにくいようなところ、また多様性が手続きの数にとどまっているようなところもあり、集団設計の弱点がでてしまっているところだろうか。集団設計をこれからも追求されるはずだ。今後の展開を期待したい。



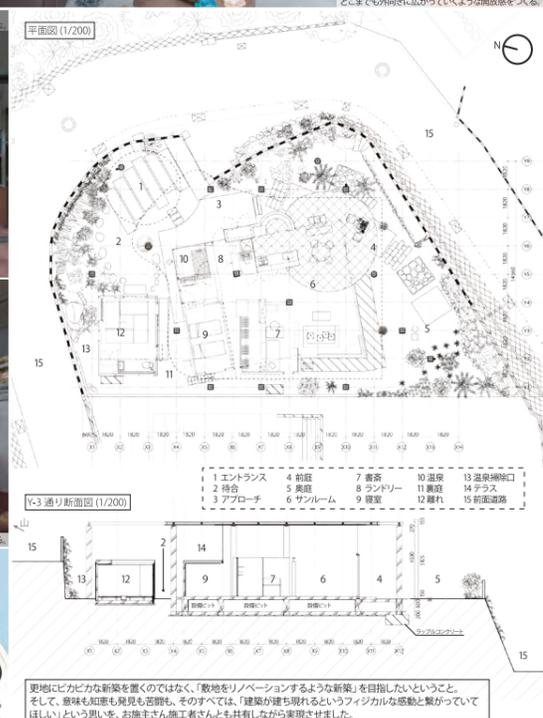
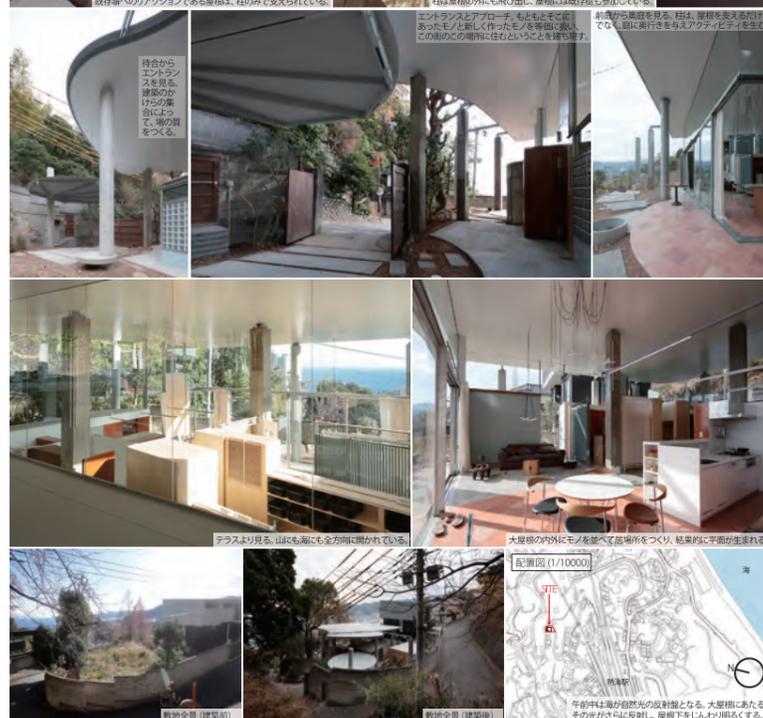
東京都心に建つ鉄筋コンクリート造の賃貸集合住宅において、建築躯体のもつ物質的な強度を通して都市に棲まう可能性を問う作品である。断面寸法の変化する柱・梁によってまちの風景や日光との関係が強調され、都市の喧騒や動きとともに根を張る下階から、空を捕まえ浮遊するような上階まで、積層された室が変化する。さらに、躯体のなかで逆梁やアルコーブを人の所作と組み合わせた部分の空間づくりはとても明快であり、完成度の高い作品



であると審査員一同が唸ることとなった。それと同時に、プレゼンテーションから期待したブルータルともいえる建築躯体の力強さは、内装合板の丁寧な処理により思いのほか優しく仕上げられ、住み手が不確定な賃貸の宿命ともいえる平準化に着地したように感じられた。審査員長の掲げた「希望のある住宅」に対し、より発見的な躯体と身体との関係を生む空間があったのでは、という問いが残った。しかしながら、志向する都市の棲家と不特定の人の暮らしを調停する誠実さの表れた清々しい建築であることは確かである。

家の内にもうひとつ、家が入り子状に入っていて、その内の家の周りに、室内化された庭ができる。家の内の家は、将来もその必要が変わらないだろう機能にあてられ、室内庭は将来の変化に対応する。以上がこの住宅の基本的なつくりだが、実際に訪れてみると、その構成はあまり強くなく、全体におおらかにつくられているようだった。そこがこの住宅の良いところであり、悪いところだろう。構成に厳格であるならば、階段は「家」のなかに設けられるのが筋だろうし、そうでなければ、「庭」をたとえば子供部屋に分割するのに階段が邪魔になる。「家」を表わすように貼られ白く塗られた板辺は、その表現を支えるための記号で、それがないと、ここで考えられた構成は見えなくなるかもしれない。じつはいちばん良かったのは、3階の「ファミリースペース」のなかほどにある、「小学生の息子が飛び降りる」1mを超える段差であり、このようなギャップが「家」と「庭」の間で生まれていたらどんなに「希望」が感じられたか、とも思った。しかしそうしなかったのも設計者の判断で、その穏やかさがやはりこの家の良いところだろうと思う。







南から見る。1、2階は店舗が入り、3階から10階は共同住宅。3階階は多層一住戸で、3、9階は階段が2方向あり、外壁にガラス張りのバルコニーが設けられている。



柱が無く、開放的な実用空間。 9F 段差 450mm



窓の深い窓は水平移動し、家まわりへの視線誘導を行う。 8F 段差 450mm



右のベッドスペースが広く見えます。 6F 段差 550mm

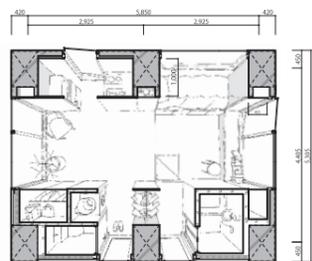


辰巳アパートメントハウス

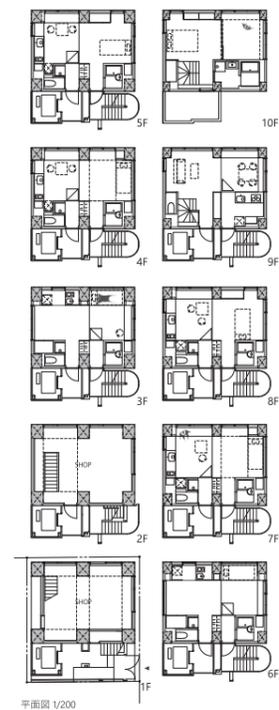
幹線道路と地下鉄に接し、高速道路にも近い都心の集住。R・C造の柱や梁の間に、人を包みこむような居場所をつくり、振動と騒音から遠ざけたいと考えた。

柱や梁は、構造的に下層ほど大きく、生まれるくぼみの寸法の違いが、地上の増築からの距離に対応し、下層ではより深く人を包み、上層ではより開く開放的になる。

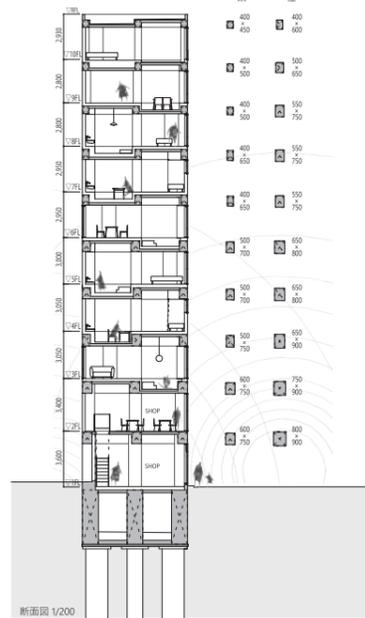
各階のくぼみの奥行きや高さは、机やベンチ、ベッドスペース等として使えるよう仕上げで調整している。ただ、住み手が能動的にかかわれるよう、行為や用途の一時的な決め方ではあるが、機能を提供するといふより、そこに居るための手助けを提供する方が、将来にわたって躯体に人が寄り添い続けることができると考えた。



3階平面詳細バース 1/80



平面図 1/200



断面図 1/200



段差はベンチ、またはドレープともなる。高層の風景は下階より見れる。



河原の2.5m幅体のバルコニー、実高が低い部分は専有面積で2100mm。 3F 段差 690mm



7F 段差 450mm



4F 段差 630mm

机の高さのくぼみが大人を包み、住の存在を感じ。



川原からの外観。大きく開いたバルコニーで、街区のコーナーを包みこむ。

地域環境に連続する「共」の空間
 郊外住宅地の角地に建つ、交流と憩いの場が立体的に交差する賃貸長屋の計画である。領域を横断するよう立体的に交差・結合する外部階段やバルコニー、ピロティによって専有空間の暖味化、外部空間の匿名化を試みた。また、潜在していた角地の買を最大化したオープンスペースのように、住人自らの環境への主体的な関わりによって運営、更新される居住空間が群となり、大きな建築に重ね合わせることで、住宅地の交差点周りに固有の風景が育まれていく。屋外で「私」のテリトリーを意識することが薄らぎ、「誰のものでもあって誰のものでもない場所」という「共」独自の空間をテナントリーでも成立させるきっかけとなる。



道路を共有することで生まれるコミュニケーション。 一緒に居ることによってつながる。 一つのまにか絡まっていく隣人との距離。



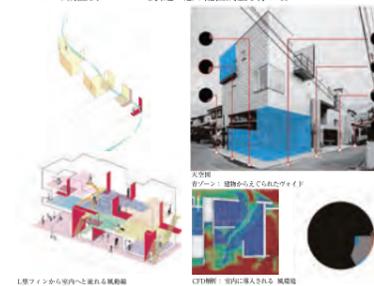
コーナーのピロティを活用したテンポラリーなカフェ。



建物中央部がコミュニティで集まれる居るべき場所。



風環境を屋内へと編み込むL型フィン
 街路から浮き上がるL型フィンは、バルコニーを中心とした外部空間を建築へと買入させ、街路上の風を室内へと流す役割を担っている。また、室内への風の通り道をCFDシミュレーションで検証し、バルコニーと引違い窓の配置調整を行った。



L型フィンから室内へと流れる風環境。 CFD解析：実際に導入した、風環境。



住戸間の階差。階差に合わせた高さ（柱）を「ハイベーン」で調整。 屋外階段と住戸間のテラス。 屋外階段と住戸間のテラス。 車庫前のピロティに設置したベンチ。 車庫からの屋外階段と住戸間のテラス。



西側外観。大空間によって浮かれた建物ボリューム。



配置図S-1/3000

Around the Corner Grain



1/300 新断面図



3F roomD roomE roomF



2F roomA roomB roomC



1F roomG



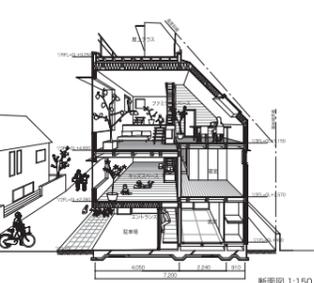
1/300 新断面図



いえとそとのいえ

「いえ」と「そと」ふたつの領域を内包する住まい

夫婦と小さな子供2人のための住宅である。住まいは、今後起こり得る生活の変化に寄り添っていけることが望ましい。そこで、変わらず住機能として最低限必要なスペース（水回りや寝室）を納めた「いえ」と呼ぶ部分と、家族の成長と共に変化していきける外部空間のような「そと」と呼ぶ部分で構成される住宅を考えた。
敷地は都内の駅前住宅密集地であり、都市の様々な景色が一目に飛び込んでくる。そんな周辺の景色を感じられる南側半分を「そと」の領域、北半分を「いえ」の領域と位置づけた。通りから土間を抜け階段を上がっていくと「いえ」の奥には生活が見え隠れし、「そと」には遠ばたで子供が遊んでいるような景色が展開している。



住宅建築賞受賞者プロフィール

桃山ハウス



中川 エリカ

Erika Nakagawa

1983年：東京都生まれ
2005年：横浜国立大学工学部建築学科卒業
2007年：東京藝術大学大学院美術研究科修了
2007～2014年：オンデザイン
2014年：中川エリカ建築設計事務所設立
2014～2016年：横浜国立大学大学院Y-GSA設計助手
現在、東京藝術大学、法政大学、芝浦工業大学非常勤講師

TRANS



駒田 剛司

Takeshi Komada

1965年：神奈川県生まれ
1989年：東京大学工学部建築学科卒業
1989～1995年：香山壽夫建築研究所
1995～2000年：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻助手
2000年：駒田建築設計事務所
現在、前橋工科大学准教授



駒田 由香

Yuka Komada

1966年：福岡県生まれ
1989年：九州大学工学部建築学科卒業
1989～1993年：TOTO(キッチン開発課)
1993～1996年：サティスデザイン
1996年：駒田建築設計事務所設立
現在、明治大学兼任講師、東京工芸大学非常勤講師

辰巳アパートメントハウス



伊藤 博之

Hiroyuki Ito

1970年：埼玉県生まれ
1993年：東京大学工学部建築学科卒業
1995年：東京大学大学院修士課程修了
1995～1998年：日建設計勤務
1998年：O.F.D.A.共同設立
1999年：伊藤博之建築設計事務所設立
2003～2010年：東京理科大学非常勤講師
2008～2013年：東京電機大学非常勤講師
現在、お茶の水女子大学、慶應義塾大学、日本大学、京都造形大学非常勤講師

Around the Corner Grain



佐野 哲史

Satoshi Sano

©Okura Hideki

1980年：埼玉県生まれ
2003年：早稲田大学理工学部建築学科卒業
2004年：Renzo Piano Building Workshop, Paris
2006年：早稲田大学大学院修士課程修了
2006～2009年：隈研吾建築都市設計事務所
2009年～：Eureka 共同主宰
2014年～：慶應義塾大学理工学部講師(非常勤)
2015～2016年：東京藝術大学教育研究助手
2016年～：慶應義塾大学大学院理工学研究科 後期博士課程



高野 洋平

Yohei Takano

©中村絵

1979年：愛知県生まれ
2003年：千葉大学大学院修士課程修了
2003～2013年：佐藤総合計画
2013年～：MARU.architecture共同主宰
2013～2016年：千葉大学大学院博士課程(工学博士)
2015年～：伊東建築塾講師
2017年～：関東学院大学非常勤講師



森田 祥子

Sachiko Morita

©中村絵

1982年：茨城県生まれ
2008年：早稲田大学大学院修士課程修了
2010～2013年：NASCA
2010年：MARU.architecture設立
2011～2014年：東京大学特任研究員
2013年～：MARU.architecture共同主宰

いえとそとのいえ



萩野 智香

Chika Hagino

1975年：大阪府生まれ
1997年：東京電機大学工学部建築学科卒業
1999年：東京電機大学大学院建築学専攻修了
1999～2003年：都市環境計画研究所
2003～2010年：若松均建築設計事務所
2010年：萩野智香建築設計事務所設立